



米作り新聞



田や川で生き物調査

6月28日にアイガモの谷口さんのところで5年生6人と担任の先生、校長先生が生き物調査を行った。5年生は、田んぼと川へ行きいろいろな生き物を真剣に捕まえていた。とった生き物は全部で12種類いた。捕まえた生き物は、冷たい水のところにすんでいるため、調べた後すぐに、川へとつながる水路に返した。川で、生き物を捕まえているとき、脇本泰地さんがカジカノメスを捕まえていた。体長は9センチくらいだった。中村ひなたさん、脇本心結さんのチームは、プラナリアやモクスガニを捕まえていた。担任の松岡誠吾先生は、ザリガニとオタマジャクシを捕まえていた。



私たちは、田んぼと周りの生き物がどのようにつながっているのかを谷口さんに聞いてみた。すると、谷口さんが食物連鎖のことについて話してくれた。食べた食べられたりを繰り返して、自然の生態系が成り立っていることを教えてくれた。また、アイガモの谷口では、あまり農業を使わず、生き物同士の関わりを利用しながら農業をしていることを教わった。

対田の田んぼは、久斗川と久谷川の2種類の川から水を入れていているらしい。上流に工場がなく、とてもきれいな川の水なので生き物がたくさん生息している。だから、お米もおいしく育つらしい。

初めての田植え

5月24日、浜坂東小の5年生6人がアイガモの谷口さんと、総合的な学習として田植え体験をした。

谷口さんは、アイガモ農法を行っており、田んぼにアイガモを入れ、田んぼの雑草を食べてくれる。農薬をあまり使わず環境にやさしい農業を行っている。私たちが5年生は、実際にアイガモが入っている田んぼを見学し、「かわいらしい」「一生懸命作業しててすごい」と感心していた。

泥に入って手植え作業

5年生が田植えをする前、谷口さんは、2種類の稲の苗の育て方を紹介した。一つは「マツト苗」、もう一つは「ポット苗」だ。私たちは、ポット苗

田植えが終わると谷口さんに田植えに関する質問をした。良い水を作るには、いい土といふので興味深く聞いた。



アイガモとふれあう



手植え作業に挑戦

こつを習い稲刈り

長くつ抜けなくて苦戦

9月30日に5年生が、アイガモの谷口さんで稲刈りを行った。

みんなが、早速、田んぼに入る。谷口さんは「イネの元部分をむくとはまっ

いよ」と教えてくれた。尾崎琉聖さんは「稲を刈ろうとすると思ったよりもかたくておどろきました」と感想を言っていた。

稲刈りを終えたら、刈り取った稲をわらで結び作業をした。稲刈りで疲れた様子だったが、がんばってその作業をこなした。結びにもこつが必要で、谷口さんも難しいと言っていた。谷口さんは「うちの母親の世代だと簡単にできるんだよ」と話しており、5年生のみんなは、とてもおもしろい様子だった。

最後に浜坂東小のPRの動画を撮った。すべての作業が終わった後、谷口さんから玄米アイスクリームをこごろになった。みんながおいしく満足し、「おいしい」「疲れがとれたなあ」と口々に言っていた。



パケツリレーで稲木に稲をかける

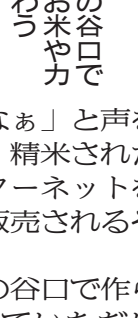


かまで稲を刈り取る

「すごいスピードだなあ」と声を上げ、感心していた。精米されたお米や商品は、インターネットを通して、全国各地に販売されるそうだ。

最後に、アイガモの谷口で作られた商品を試食させていただいた。みんなは、「いつも食べるお米よりもおいしい」「お米一粒一粒が輝いている」「カモの肉がジューシーでおいしい」とお米やカモの肉の加工品を食べながら、感想を言っていた。

「命をいただいていることに感謝しつつ、みんなとても幸せで、満足そうな様子だった。



アイガモの谷口で作られたお米やカモの肉を味わう



11月8日、5年生最後の米作り体験を行った。そこでは、米の商品化や精米について学習した。

はじめに谷口さんから、アイガモの谷口の歴史や農業に対する思いについての説明を受けた。「有機農法」について初めて聞いた人もいて、熱心にメモを取っていた。「自然とともに農業を行っている」という谷口さんの言葉が、みんなの心に残った。

次に、工場の中を見学した。そこには、米がたくさん入った袋や、米を精米する機械があった。実際に、米の精米機や色別機を動かしてくれた時は、みんなは、口々に

編集後記

稲刈りは、地面がドロドロで歩きにくくて足が泥にはまっちゃったけど、たくさん刈れて良かったです。かまをもって稲を刈るのがむずかしかったです。稲を結ぶのも、ゆるく結んで稲が落ちたりして加減がむずかしかったです。谷口さんのアイガモ農法の建物の中には、米がいっぱい入っている大きな袋がたくさんありました。質問もしました。人集めはどうしているかなどを聞きました。

(西村杏子)

家の手伝いで、何回か稲刈りはしたことがありますが、機械でしかしたことが

ありません。今はほとんどの農家が、機械で稲刈りをしています。米作り体験を行って思ったことは「昔と今では、やり方が違う」です。ぬかるんだ田んぼを歩いて、しょうぶな稲を切るには、バランス感覚や力が必要で、昔の人はこんなにもたいへんなことをしていたんだと実感しました。

稲刈りは真っすぐに刈ることができず、斜めになってしまい、とてもむずかしかったです。今は機械で、私たちがやっていた刈り方よりも速く、真っすぐに刈れるようになりました。時代の進歩が、すごいと思いました。アイガモの谷口さんに米がどうやって、商品になったかなど、お話を聞き、そのあと、私たちの作った新聞を渡しました。とても喜んでもらっ

たので、うれしかったです。

(中村ひなた)

初めて稲を刈って、思っていた以上に力を入れないと刈ることができませんでした。大変だったけどだんだん慣れてきて、とても早く終わりました。松岡先生からは、「みつきさんは稲刈りマシーンだね」とほめられました。谷口さんのお米は、いつも家で食べているお米とは全然違いました。15合を5年生と松岡先生と校長先生で食べました。とてもおいしかったです。

(岡村弥月)

機械で稲刈りをしているところを見ると、簡単そうですと切れるのかと思っていました。でも実際に稲刈りをするとかたくて、ギコギコしないといけない近くで見ると、すごく長く腰をか

がめないといけないことを知りました。そして谷口さんが今あるのは、昔の苦勞があったからなのだとことを知りました。今までにどんな仕事や苦勞をして、アイガモ米がブランド米になったかを知りました。

稲刈り、米の商品化で学んだことが二つあります。一つ目は昔の人のすごさです。稲刈りの時、5分ぐらい刈ったら、もうつかれてしまいました。毎年行っていた昔の人は、すごいなおもいました。二つ目は有機農法についてです。農業を使わないものだというイメージが強いのですが、本当は、自然にしたがってするものと教えていただきました。確かに、農業は自然にはないけど、アイガモは自然の生き物です。

(尾崎琉聖)

はまさかひがし。 浜坂東小新聞

学校概要

- 【学校名】新温泉町立浜坂東小学校
- 【所在地】新温泉町高末
- 【校長名】山崎香苗
- 【児童数】37人

学校教育目標

ふるさとを誇りに、共に支え合い自ら考え行動する児童の育成

【沿革】小学校再編に伴い、久斗小と久斗山小が統合し、2003(平成15)年に浜坂町立浜坂東小として創立した。さらに翌年、赤崎小、御火浦小と統合、05(同17年)に読書活動優秀実践校として、文部科学省表彰を受けた。2022(令和4)年度に新築された木のぬくもりのある校舎は、地域の社会体育、社会教育活動推進の場としても広く活用されている。

協議会を設置した学校(CS)となり、ふること学習、地域学習の観点から学校教育活動の推進を図っている。1995(同7)年度に新築された木のぬくもりのある校舎は、地域の社会体育、社会教育活動推進の場としても広く活用されている。

5年生が作った新聞です